

会場は、百人を越える人たちが溢れていた。

入口ではこの日のために雇われたのであろう大学生の子どもたちが、お揃いのミニスカート姿で出迎えた。どの子もとびきり明るい笑顔を見せて。

会場に入ると、入口に展示コーナーがあり、会社の販売担当らしい職員が晴れやかな笑顔で浄水器の近くに控え、型式の異なる五台の器の傍に立ち、浄水を無料でサービスしてくれた。反対側ではこの浄水を用いて作られ、加工されたというケーキや焼きたての肉などの、試食が出来るのだった。

その奥のガラスケースには、これも浄水を用いて作られたという色とりどりの、ヘルスケア商品、スキンケア商品、ヘアケア商品、ボディケア商品、パーソナル商品、フード商品などが飾られ、華やかな照明の中に輝きを放っていた。入場者は、ミニスカートの子から小さな手提げを受け取り、販売員からケーキやソーゼージなどの試食を勧められ、色鮮やかな化粧品などの前でしばらく立ち止まり、大きな拍手に迎えられる会場に入るのであった。

「どうぞ、好きな席に遠慮なく」平田早苗が会場の前列

へと誘ってくれる。

「ご迷惑をおかけします。私たちのためにわざわざ日曜日の時間を割いて、会場への案内までしていただき、恐縮です」

真理子は夫の幸一とともに、高速バスで二時間ほどかけて到着したばかりだった。

普段、化粧品とか装飾品にはあまり興味をもたないのがあるが、この会社の浄水器で作られた水には特別の関心を抱き、早苗の「近く会社の講演会があるので、一度出掛けてみませんか」という誘いに乗ったのだった。

「この水、回源水と呼ばれてね、天然の成分に最も近い水という意味らしいの。私たちが日々化学物質に汚染され、知らず知らずのうちに触まれている体を、この水を使うことによって、それこそ自然体に戻してくれるというの」

真理子は二番目の子を生んだ後、精神的に落ち込むことが多い、発汗や苛つき、肌のトラブルなどで悩んでいたのだった。それが、隣家に住む早苗の実母であるヨシが「新しいコーヒーが手に入ったので、召し上がらない」と、堀越しに差し入れてくれたことが切っ掛けで、回源水を知ったのである。

コーヒーをあまり好まない真理子が、香りのよさに惹かれ、飲んでみると味に丸みがあつて実に美味しかった。ピ

ザを焼いてお札に出向くと、ヨシはにこりと笑って、「これには秘密があるのよ」と、台所に誘ったのだった。

綺麗好きのヨシの台所には幾度か通されたことがあり、料理もよくご馳走になった。ヨシの作るものは落ち着いた味で、何でも真理子の口に合い、そのレシピの幾つかを教えてもらったものだ。真理子が越して来て以来だから、ヨシとは十五年来の付き合いになり、親子ほど歳が離れていることもあって、家庭内のことを相談し合ったりする間柄でもあった。

「これなのよ、秘密のものは」  
「普通の浄水器ですよ。だったら、うちでも使っていますよ」

「飲んでみる。その後で感想を聞かせてもらおうかしら」  
コップ一杯の澄み通った水が、冷たい岩清水のそれを思ひ起こさせた。口に含んでみると、味がまるやかで舌に染み通ってくる。一気に飲んだ。

「美味しい。これ、何か違う」  
「でしょう。私も半信半疑だったの。一年になるかしら。早苗がね、二年前から勧めてくれてただけで、水なんかどれも同じだろうって、取り合わなかったのね。そうしたら、ペッドボトルに詰めて来てくれる水を、最初に気に入ったのが旦那。コーヒーが美味しい。ご飯の味が違うって言い出したの。そう言われれば私もそう思わないでもなくて、

早苗に話したら、すぐに取り付けてくれたって訳なの」

「確かに、水の粒子が小さく、体にスウツと入ってくるみたい」

「早苗はどこで知ったものか、自慢げに言うのよ。何度も説明したじゃないって。水道の水でも、井戸の水でも回源水に変えることが出来、それが体の隅々まで行き渡ること、体中に詰まった毒素を洗い出し、元の姿に変えてくれるんだと」

ヨシは早苗の話聞いて、なお一月の間自分の体調の変化を見、これなら良さそうだといいことで真理子にも勧めたのだという。

「よかったら、ペッドボトルでいつでも差し上げるわ。これで野菜を洗ったり、ご飯を炊いてごらんなさい」

ヨシからの回源水の差し入れが始まった。毎日、朝夕、二リットルのペッドボトルに五本ずつが届くことになった。届くというのは正確なことではなく、真理子が二リットルのボトルを持って、ヨシの台所に行き、自分で浄水器のコックを捻るのである。元は井戸水であるから、水道料金の心配もなくていいのだという。

日が経つにつれ、真理子が水の良さのを感じ始めたと言うと、ヨシはリビングの椅子で本当に嬉しそうな目をした。

「今になって口惜まれるのは、せめて旦那が生きているうちに取り付けてやれば、どれだけ喜んだことか。そうすれば、好きなコーヒーやお茶を自由に楽しめたろうし、ひよっとして水を飲み続けることで、持病の心臓の方にも良い作用をしたのかもしれないね。考えてみれば、時々早苗が届けてくれる水で、十年は寿命が延びたよとよく言っていたんだったわ」と明るく笑った。

ヨシと五十五年連れ添った夫の容助が死んだのは一年半前であったが、ようやく容助のことを冷静に考えられる氣持のゆとりが出てきたという。二人は評判のおしどり夫婦で、容助は定年後、地域の民生委員を務めるなど、骨身を惜しまずに働いた。

二人の間には三人の娘があり、三番目の早苗が隣の市に嫁いでいて、容助の月命日やヨシの話し相手にときどき寄っていた。

真理子が回源水を使い始めてからというものの、まず肌のトラブルがかなり改善し、発汗や苛つきもいくらか落ち着き出したのではないかと感じた。それをヨシから聞いたというので、早苗が真理子に「よかったですね」と話し掛けてきた。

真理子が越して来たときには、早苗はもう嫁いでいたからあまり親密な付き合いはしていないが、ヨシを訪ねて来るときどき顔を会わせていた。

「お母様に水をたくさんいただいて、とても助けられています。本当に、いつも親切にしてくださいだき感謝しているんです。お父様にも良くしていただいて。もう、一年半になられるんですね。あの優しい風貌が、今でも思い出されます」

「そう言っていたら、嬉しいですね。父も喜んでいてと思います。ところで浄水のこと、気に入ってくださってありますがどうございます。母の台所に無理矢理付けてやったのですが、お隣さんにも喜んでいただいととても感謝です」

「お母様からは本当に親切にしてくださいだき、お陰様で肌の調子が良くなり、体調も良くなりました」

「そうなんです。この浄水、魔法の水なんです。この水だけで汚れ物を落とせるんです。ええ、洗剤いらずで切り花など、何倍も長持ちします。食品にはいろんな農薬や化学物質が付着したままなのですが、しばらく浸けておくだけでこれらの有害物が流れてしまうんです。お肌にも勿論いいですよ」

何度か立ち話をしているうち、「浄水器を作っている隣の街で、近く講演会が行われるのです。興味をお持ちでしたら、一度聞かれてみませんか。もし購入されるとしても、たいへん高価な商品ですから、よくご自分の目と耳で

確かめ、納得されてからの方がいいですよ」という話になり、「次週の日曜日に北山市の中央会館で行われますから、ご都合を教えてください」ということになったのだった。

真理子は、五十万円近くするものだと聞いていたので、夫の幸一に顛末を話し、相談してみた。幸一も、最近コーヒーやお茶や米の味が変わったのに気付き、真理子からいきさつを聞いていたので、興味をそそられたのだった。

「十五年お付き合いしているヨシさんの蛇口からいたいた水なのよ。この水で台所の汚れを拭くと、嘘みたいに綺麗になるの。私の肌のトラブルも落ち着いてきたし、早苗さんの方に参加のことを返事していいかしら」

幸一は、日頃物にこだわらない真理子がひどく強い興味を示すのは、五十万円という値段のせいもあり、自分にも是非同じ話を聞かせ、購入するに値するかどうかの判断を共にしてほしいと願っているのだと知れたから、一緒に出掛けてみようかと答えたのだった。

「早苗さんが案内してくれるって。隣県の北山市の高速バスの停留所まで来てくれることになったわ。わざわざ日曜日の時間に。手土産の準備などしなくちゃ」

真理子と幸一は、片道千五百円の切符を求め、バス停で早苗の出迎えを受け、会場に向かったのだった。

「私どものために、貴重な休日を潰させてしまいました。感謝いたします」

そう言いながら手土産を渡すとき、早苗の表情に少しだけ怪訝な色が浮かんだのに気付かなかった。

会場の中は、中央部に浄水器の噂を聞いて来たと思われる客が椅子席に隙間もないほどに詰めて座り、周囲の席に早苗たち十数名が掛けた。場内に流れていた涼やかな曲が、少しだけボリュームを絞られ、民放局から雇われて来たのである。華やいだ女性が舞台の袖に立ち、講演会の開始を告げた。

講師は、社の創立者であり地球環境を考える会最高顧問だと紹介され、颯爽と登場したのは、まだ三十代後半と見える青年であった。青年社長は、最初に来場者に対し、会の趣旨に賛同をいただいたことへの懇篤な感謝の言葉を述べ、会はこの奇跡とも言わべき緑の大地である地球を諸々の破壊から守るための運動を展開しており、その理念を具現する根源のものとして「本来の自然の恵みの回流水」からの出発を行うとの位置付けをし、回流水の利用により自らの健康を取り戻し、これを広く普及させることにより、遠大な目標に向かって行きたいという内容をOHPを縦横に用い、宇宙、世界、日本、生活といった章に分け、流れるが如くに説明した。

それは、間違っても抗おうなどとは思いつきもしないほど、具体例を交えた巧みな説明であった。およそ一時間足

らずの説明が終わったとき、割れんばかりの拍手が自然に湧き起こったことをみれば、雰囲気を知れよう。

早苗はと見ると、多分早苗が紹介したのであろう十数人に囲まれ、和やかに微笑み、少し上気した表情で質問に答えているらしかった。

「早苗さん、私たちだけを案内してくれたのじゃなかったのね」真理子が言った。「なるほど、五十万円という値段の意味がわかりかけたな」と幸一が言った。

「どうということなのかしら。しかし、考えてみれば彼女、一度も自分が普及会員だなどとは言わなかったわ。もつとも、ボランティアだとも言わなかったけれど」

「じゃあ、回源水はなし、ってことでもいいのかい」

「社長の説明にあつたとおり、毎日使ってみてわかったけれど、本当に優れものに違いないわ。肌の調子も、精神的な苦痛さえ洗い流してくれそう。水道水だと三日と持たなかつた切り花が、一か月経つても枯れず、根が伸び出してきたわ。台所の汚れなど、布巾で一拭きするだけで綺麗さっぱりなの」

「こつちが勝手に早苗さんのことを、ボランティアだと思ひ込んでいたというだけの話なのかな。もともとヨシさんが回源水を勧めてくれたのは、純粹に好意からであつた、ということを感じたいな」

「仕事なのよね。私、早苗さんと同じ普及会員にはならない。だけど、うちの水道にしばらく付けてみて、気に入らなければ解約するというのは駄目かしら」

真理子は会場の喧噪からは出て来たものの、回源水への思いを断つ、というまでにはいかないという表情で、三分に一本の高速バスを三台遣り過こした。

了